

第2回フレックスコミックス異世界マンガ作画大賞 課題作品3 (女子向け)

◆仮タイトル

断罪中に前世の記憶を取り戻した悪役令嬢ですが、義兄には溺愛されているようです

◆概要

ルクレツィアは、婚約者のコンラッドを愛するあまり、彼が親しくしているメイドのラナに嫉妬していた。

ラナを追い詰めた彼女だったけれど、その場を目撃したコンラッドから断罪されるうちに前世の記憶を思い出す。

身分違いの愛を描いた小説の悪役令嬢に、自分が転生していることに気付いたルクレツィアは……？

◆キャラクター設定 (下記4名のキャラクターデザインを作成して下さい)

○ルクレツィア

本作品ヒロイン。

ヴォワール侯爵家の長女であり、艶やかな金髪に紫色の瞳をした人目を惹く美人。母が政略結婚した前夫との娘であり、父の暴力により両親の離婚を経験し、母の再婚後も愛されないまま不遇な幼少期を過ごす。愛情に飢えていた分も、婚約者のコンラッドに愛を求めて執着していた。

(補足) 母と義父は元々思い合っていたが、それぞれ政略結婚で別の相手と結婚し、その後ようやく再婚により結ばれて、前配偶者との間に生まれたルクレツィアと義兄は家で疎外感を覚えて過ごす。

○ユリウス

本作品ヒーロー。

黒髪碧眼の眉目秀麗な青年。ルクレツィアの義兄でありヴォワール侯爵家長男だが、父と義母の間に男児が生まれてから、両親の意思を汲んで、まだ幼い弟に家督を譲って家を出ることを決める。同じような不遇な状況の中、何かと彼を気遣ってくれたルクレツィアに心惹かれているが、その気持ちは隠している。

○コンラッド

カニス侯爵家の嫡男で、政略結婚のためにルクレツィアの婚約者となったが、密かにメイドのラナに想いを寄せている。プラチナブロンドの髪に緑の瞳の美男子。ルクレツィアが前世で読んだ小説のヒーロー。

○ラナ…カニス侯爵家に住み込みで働くメイドの娘であり、自身もカニス侯爵家でメイドとして働いている。コンラッドを慕っているが、身分の違いからその気持ちは隠している。茶色の髪に茶色の瞳で、愛らしいが比較的地味な容姿。ルクレツィアが前世で読んだ小説のヒロイン。

◆課題小説

(以下から一部シーンを抜粋して、マンガ 4-8P 分の完成原稿を仕上げてください)

ルクレツィアは、婚約者コンラッドのいるカニス侯爵家を訪れていた。愛する婚約者の家にやって来ているというのに、彼女の表情は険しい。ちょうど外出中だったコンラッドを待つ間に、彼女は侯爵家の使用人に頼んでメイドのラナを呼び出していた。

「……お呼びでしょうか」

おどおどとした様子で、ラナが応接間にいるルクレツィアの前に現れる。平凡な茶色の髪と同色の瞳をした彼女を、ルクレツィアは冷やかな目で眺めた。

(コンラッド様は、こんな娘のどこがいいのかしら)

ラナは、カニス侯爵家に住み込みのメイドの娘で、彼女自身もこの家でメイドをしている。コンラッドが幼い頃から側にいたこともあってか、彼がラナに向ける瞳はとりわけ優しいものだった。

女の勘で、ルクレツィアはコンラッドの愛情が自分よりもラナに向いていることを感じていた。その後、コンラッドがラナを抱き締めている場面を見てしまったルクレツィアは、怒りを胸に滾らせていたのだ。

侯爵家の長女であり、優れた美貌の持ち主であるルクレツィアは、自分がラナに劣るところが何も思い浮かばなかった。

(私に何一つ叶うところのない平民のくせに、身分差もわきまえずにコンラッド様を誘惑するなんて。身の程知らずもいいところだわ)

それから、ルクレツィアは機会を見つけては、ラナに辛辣な物言いをしたり、カニス侯爵家を出るように伝えたりしているが、一向に状況が改善される様子はない。

埒が明かないことに激怒した彼女は、ラナとの決着を着けるために、あえてコンラッドの不在時にカニス侯爵家を訪れていたのだった。

「貴女には前にも、カニス侯爵家を出て行けと言ったわよね。どうしてまだここにいるの？」

俯いたラナが瞳を潤ませる。

「どうかご容赦くださいませ。母も私も、ずっと以前からこのお屋敷でお世話になってます。他に行く当てなどないのです」

「じゃあはっきり言わせてもらおうわ。メイドの分際で次期侯爵を誘惑するなんて、いったいどういう神経をしているの？ 許されることじゃないわよ」

「私、そんなつもりは……」

戸惑うラナに向かって、ルクレツィアは怒りに任せて、鞘に入った護身用の短刀を投げ付けた。ラナの足元に短刀が転がる。

「貴女、邪魔なのよ。どうしてもこの家を出て行く気がないのなら、ここで死んで詫びたらどう？」

きついルクレツィアの口調に、ラナの顔がさあっと青ざめる。護身用の短刀とはいえ、美しい金細工と宝石が繊細に鞘にあしらわれたその品は、限られた高位貴族にしか手にすることのできない逸品だった。

真っ青なラナの前に美しい鞘に入った短刀が転がる様子を見た瞬間、ルクレツィアは不思議な既視感を覚えていた。

(あら？ この場面、どこかで……？)

震えるラナを眺めながら、ルクレツィアが奇妙な感覚に捕らわれていた、その時だった。

バンと大きな音がして、応接間のドアが開かれる。息せき切って部屋に駆け込んできたコンラッドが、ルクレツィアを睨み付けた。

「君は、ラナに何をしているんだ？」

「私は、彼女にここを出て行って欲しいと伝えただけですわ」

「何を勝手なことを……！ 大丈夫かい、ラナ？」

コンラッドに優しく肩を抱き寄せられ、ラナはぼろぼろと目から涙を溢す。

「私のせいでご迷惑を掛けてしまい、申し訳ありません」

「君が謝ることなんて何もない。ルクレツィアからは、こんな嫌がらせばかり受けていたのだろう？」

コンラッドが凍り付くような目でルクレツィアを見据える。彼と目が合った時、突然、彼女の脳裏に前世の記憶がフラッシュバックした。

(ああ、これは……私が好きだった小説の世界だわ)

侯爵家嫡男とメイドとの、身分違いの禁断の恋を描いた小説がルクレツィアの頭に甦る。ヒロインのメイドを目の敵にした結果、婚約破棄を告げられる悪役令嬢が自分だということに、彼女はその時初めて気付いたのだった。

「ルクレツィア。君との婚約は、今日を限りに破棄させてもらおう」

コンラッドの言葉に、彼女は悔しげにぎゅっと唇を噛む。

(こんな断罪中に前世の記憶を思い出しても、もう手の打ちようがないわ)

前世に小説を読んだ時には、コンラッドとラナの仲を邪魔するルクレツィアを腹立たしく思っていた彼女だったけれど、本人になって初めて彼女の行動の理由が腑に落ちていた。

ルクレツィアは、政略結婚させられた母と前夫の娘だ。一女のルクレツィアを授かるも、夫の暴力から逃げるように家を出た母を救ったのが、以前からの彼女の想い人であり、政略結婚をした妻を病で亡くした義父だったのだ。彼にも一人息子のユリウスがおり、再婚によってルクレツィアの義兄になっている。

元々想い合っていた母と義父にとって、ルクレツィアは自分が邪魔者に過ぎないことを敏感に感じ取っていた。金と身分と美しい容姿はあっても、彼女は幼少期から愛情に飢えていたのだ。そんな彼女にとって、政略結婚目的とはいえ優しく美しいコンラッドと婚約し、彼に恋に落ちてからというもの、彼ならばきっと自分を幸せにしてくれると信じて、彼に執着していたのだった。

(小説の中のルクレツィアは、この時どうしていたかしら?)

彼女はぼんやりと考えながら、無意識のままに短刀を拾い上げ、鞘から抜いていた。鋭い刃がシャンデリアの光を反射して輝く。

「何をする気だ？」

コンラッドの緊迫した声が彼女の耳に届く。

(そうだ、思い出した……)

小説の中のルクレツィアは、逆上して婚約破棄など認めないと泣き喚き、鞘から抜いた短刀を手にラナに斬りかかろうとしたのだった。彼女を止めようとしたコンラッドが怪我を負ったことが、破談の決定打となった。その後、怪我をしたコンラッドをラナが甲斐甲斐しく世話することで、さらに小説内の二人の絆は深まっていくのだ。

(……馬鹿馬鹿しい)

短剣を振りかざしたルクレツィアに、コンラッドが焦って口を開く。

「待て……！」

ルクレツィアはそのまま短剣を振り下ろすと、自らの美しい髪を肩からぱっさりと切り落とした。

(前世では確か、失恋したら髪を切るのだったわね)

彼女の艶やかな金髪が、応接間の床に落ちて広がる。この世界では、美しく手入れされた長い髪は貴族令嬢の嗜みと言われている。そんな大切な髪を躊躇いなく切ったルクレツィアを、コンラッドとラナは呆然と見つめていた。

痛む胸を抱えながらも、憑き物が落ちたようにすっきりとした顔で、彼女は二人の前で微笑んだ。

「婚約破棄、承知いたしました。ただし、慰謝料は十分にいただきますわよ？」

婚約者をないがしろにし、メイドを庇って婚約破棄を告げるなど、貴族として許されるものではない。前世の彼女が小説を読んで感じた以上に、実際の貴族社会では身分差は厳然として存在していた。そして、今回の婚約破棄は、ルクレツィアが踏み止まったために彼女の有責ではない。むしろ、婚約者に色目を使ったとなれば、メイドの方が咎められて当然と言ってよかった。

「……ああ、わかった」

硬い顔でコンラッドがルクレツィアに頷く。

「さようなら、コンラッド様」

ラナの肩を庇うように抱いているコンラッドにそれだけ言い放つと、ルクレツィアは二

人に背を向けた。

ヴォワール侯爵家の屋敷に戻ったルクレツィアは、その足で義兄ユリウスの部屋へと向かった。

部屋のドアを開けたユリウスが、ばつさりと短くなったルクレツィアの髪を見て驚きに目を見開く。

「ルクレツィア、いったいどうしたって言うんだ？」

「コンラッド様に婚約破棄されましたの」

「……！」

ユリウスは、彼女がコンラッドに惚れ込んでいたことを知っている。言葉を失っている義兄に向かって、ルクレツィアはさっぱりとした表情で微笑んだ。

「お義兄様、もうすぐ家を出て新しい事業を始めるのですよね。私も連れて行ってはもらえませんか？」

「ルクレツィアを？」

「はい、きっとお義兄様のお役に立ってみせますわ。人手だって必要でしょう？」

「まあその通りだし、優秀な君がいれば助かるのは確かだが……」

ルクレツィアは頭の回転も呑み込みも早いことを、彼もよく知っている。

「なら、お願いします。婚約破棄による慰謝料も入る予定ですし、多少なりとも事業の足しになるかもしれませんよ？」

ルクレツィアにとって、ユリウスは大切な同士のようなものだ。母と義父の間に男児が生まれてからというもの、幼い息子にばかり構う二人とは、彼女もユリウスも距離を置いていた。ユリウスは父と義母の意思を汲んで、自分はヴォワール侯爵家を継がずに家を出ることに決めていたのだ。聡明で美しく行動力のある彼は、血は繋がっていないとはいえ、彼女にとっては自慢の義兄だ。

ユリウスはふっと笑みを零すと、吹っ切れた顔のルクレツィアの頭をぽんと撫でた。

「君の金に頼るつもりはないが、わかったよ」

「ふふ。よろしくお願いします、お義兄様」

(これからは、私が私自身を幸せにしてみせるわ)

小説の筋書きを多少なりとも自分の力で変えられたことで、ルクレツィアの胸にも希望の光が灯っていた。ユリウスが熱の籠った瞳で彼女を見つめていたことには、彼女はまだ気付いてはいなかった。